



「令和8年度 第1回 廿日市市地域福祉活動計画推進委員会」の報告

令和8年8月10日、「令和8年度第1回廿日市市地域福祉活動計画推進委員会」を開催しました。
令和7年度に策定した第4期地域福祉活動計画(令和8年度～令和12年度)がスタートし、今回は計画策定のふりかえりや概要説明、地域資源を活かした地域づくりについて意見交換を行いました。



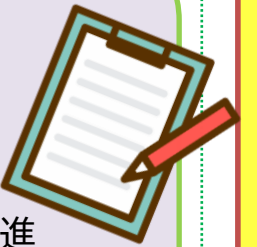
推進委員会では、第4期地域福祉活動計画の策定経過や今後5年間の推進方針を共有しました。
計画策定では、地域のさまざまな課題について話し合い、計画へ反映してきました。

今後の推進に向けて大切にすること

- ✓ 計画を「作って終わり」にしないこと
- ✓ 地域課題を見える化すること
- ✓ 地域ごとの特色を活かすこと
- ✓ 振り返りと評価を行うこと

話し合った主な地域課題

- 地域の孤立
- 担い手不足
- 災害への備え
- 若い世代の参加促進
- 企業と地域のつながり
- 多世代の交流の場づくり
- 見守りや支え合いの仕組みづくり



地域の活動を紹介しました

宮園地区 ドリームアンドピース熱気球ライド



戦後80年、宮園小学校開校35周年の節目に開催され、2日間で地域住民や関係者など400人以上が参加する、地域のつながりを感じるイベントとなりました。
また、子どもの学びを地域で支える「まるごと宮園」では、芋植えや収穫体験、収穫祭などを通じ、地域ぐるみの子育てを進めています。

吉和地区 あみあみサロン



「編み物を教えられる」「冬場の閉じこもりを防ぎたい」という地域の声から誕生した活動です。
毎週月曜日に開催され、編み物を楽しみながら交流する場としてだけでなく、見守りや居場所づくりにもつながっています。80代、90代の方も参加し、無理なく楽しみながらつながりを深めています。



グループワークで見た「地域の力」

地域に協力できること (主な意見)

病院による
専門職派遣
災害時支援



大学による
健康講座や
防災教育



こども園や
施設の
場所提供



老人クラブ
による
多世代交流



民生委員
による
見守り活動



ボランティア団体の
専門性を活かした
支援



計画を広めるためには(主な意見)

- 地域で行われている活動を写真などで紹介し、見える化する
- 地域課題と「自分たちにできること」をわかりやすく伝える
- SNSやチラシ、口コミなど多様な方法で情報発信する
- 地域の集いの場などに出向いて説明することも有効
- 「困ったときは社協につながる」という認識を広げる



広島県社会福祉協議会から、「各団体が持つ人・物・場所・専門性を地域課題と結び付け、具体的な活動につなげていくことが重要」との助言がありました。
今後5年間、さまざまな団体が協働しながら地域福祉活動計画を推進していきます。

廿日市市地域福祉活動計画ダイジェスト版完成！！

「廿日市市地域福祉活動計画」の内容を、分かりやすくまとめたダイジェスト版が完成しました。
地域の皆さんとともに進める地域福祉の取り組みや、目指す地域の姿を紹介しています。
ぜひご覧いただき、これからの地域づくりを一緒に考えるきっかけにしてください。



住民一人ひとりが主役の福祉のまちづくりへ

—令和8年度 廿日市市地域福祉活動計画推進研修会を開催—

廿日市市社会福祉協議会は令和8年9月4日、地域福祉活動計画推進研修会を開催しました。日頃から地域福祉の推進にご尽力いただいている役員や推進委員の皆さまなど多くの人にご参加いただき、地域の実践事例の紹介とグループワークを通じて、地域で取り組めることを一緒に考える一日となりました。

第4期・地域福祉活動計画とは

今年3月に策定された第4期廿日市市地域福祉活動計画は、社協が呼びかけ、住民・活動者・福祉事業者が相互に協力してつくる民間の活動行動計画です。推進委員会や研修会、ヒアリング、アンケートを通じて住民の声を丁寧に汲み取り、コンサルタントに頼ることなく“手作り”で策定されました。

計画は「①つながりと支え合いの意識づくり」「②つながりと支え合いを育む仕組みづくり」「③多様な選択肢を生み出し、個々に寄り添った仕組みづくり」「④安全で安心して暮らせる街づくり」の4つの基本目標を中心に、8つの協働目標と21の推進事項で構成されています。福祉を特別なものではなく、日常の中にある身近な行動としてとらえ、地域の小さな気づきをみんなで共有して支援につなぐ循環を目指します。

実践紹介1 | 大野第9区—「困り事アンケート」から広がる助け合い



第3層協議会推進委員会代表の神谷欽之亮さんは、サロンなどに参加している高齢者が、対象者430人中5%未満であることに着目し、残りの95%の人たちの思いを知るために困り事アンケートを実施しました。その結果、297人（約7割）から回答があり、最も多かったのはコロナ禍で感じた「寂しさ」、次いで庭の手入れに関する困りごと85件でした。これを受けて住民23人がボランティアグループを結成し、一人暮らし高齢者宅の庭の手入れを開始。活動を長く続けるため、「1回2時間で終える」ルールや、参加のたびにポイントを付与し、貯まったポイントに応じてお礼の品を進呈する制度を導入しました。また、第2回アンケートでは福祉窓口の情報提供不足や交通手段に困る人の問題など、新たな地域課題も浮かび上がりました。さらに、住民自らが空き家64軒を現地調査し、危険家屋や管理が不十分な家屋を市に通報するなど、住民主体で地域の課題解決に取り組む姿が紹介されました。

実践紹介2 | 串戸地区—防災を軸に「顔の見える関係」づくり

串戸地区自治協議会会長の梶川誠さんは、地区の課題を「住民同士の横のつながりの希薄さ」「防災への関心の低さ」ととらえ、「顔の見える関係づくり」と「防災組織の活性化」をテーマに取り組んでいます。

具体的には、若手・女性を中心に約20人の防災リーダー（防災士）を育成するほか、地区内の事業所と避難所等の協力協定を9カ所で締結。広島トヨペットとは店舗を利用して避難訓練を実施しました。また、外国人や障がいのある人、引きこもりの家族のいる家庭など、日頃“見えにくい”人への個別の避難呼びかけにも取り組んでおり、障がいのあるお子さんの保護者の体験談を防災研修で共有するなど、誰にも情報が届く体制づくりを進めています。



グループワーク—「自分たちにもできること」を共有

後半のグループワークでは、「一人の気づきから仲間を広げていく」「困り事を地域の困り事として捉える」姿勢に感銘を受けた声が寄せられました。若い世代が興味を持ちそうな活動の導入や学生との連携、助成金を活用した防犯カメラ設置による見守り、挨拶運動など、参加者それぞれの地域でできそうなアイデアが数多く出ました。「3世代交流」が顔の見える関係づくりのキーワードになるという指摘もありました。

広島県社協の松井寛泰さんは、「やれる人がやれることを着実に積み重ね、協力者を味方につけながら安心の地区を広げている取り組み」と両地区の実践を評価しました。

計画は完成形ではなく、進めながら見直していくもの。皆さまの地域でも計画を知り、話し合う機会を広げていくことが期待されます。

